

【はじめに】

凝固検査は病態の把握、先天性疾患の発見、治療効果のモニターなど、出血・血栓傾向を示す病態には様々な原因があり、それらの原因に応じて適切な治療を行う為、血液凝固検査は非常に重要な検査である。その為、凝固検査は迅速で正確なデータ報告が求められる。

【目的】

凝固検査は、採血から検査までの時間が重要となる。

基本的には血漿を分離し凍結保存するが、クリニックでは遠心機も持っておらず凍結保存する事が難しい状態である。今回我々は、検査までの凝固検査のデータが冷蔵保存と常温保存でどのようなデータ変化があるか検証を行ったので報告する。

【内容・方法】

検体の搬送時間（採血後、3時間、6時間、12時間、24時間、36時間）で冷蔵検体と常温検体でどのように検査データに差があるか検証した。

方法として、検体搬入後すぐに依頼項目の測定を行い、その後検体を攪拌し、2分割して冷蔵と常温にて検体を全血保存した。検査毎に遠心を行い、測定後すぐに攪拌するという形式にて測定を行った。

【結果】

検討を行った患者のうち、4名分をピックアップし、測定値、変動値（0時間値と24時間値の差）、変動率を下記の図にまとめた。

常温	0H	3H	6H	12H	24H	変動値	変動率
3	12.3	12.3	12.1	12.5	13.6	1.3	110.6
4	14.4	14.3	14.3	15.2	17.7	3.3	122.9
12	15.9	15.4	15.4	15.7	18.4	2.5	115.7
24	11.9	12.0	11.9	12.2	13.3	1.4	111.8

冷蔵	0H	3H	6H	12H	24H	変動値	変動率
3	12.3	12.3	12.3	12.0	13.2	0.9	107.5
4	14.4	14.0	14.2	14.6	16.0	1.6	111.1
12	15.9	15.4	15.1	15.7	16.2	0.3	101.9
24	11.9	12.2	12.0	12.0	12.9	1.0	108.4

【考察】

今回検討を行った〇〇検体のうち、〇〇%が上記結果と同じような値となった（8/15までの集計）。採血後6時間値までは大きな変動はないが、12時間後から差が大きくなり、特に24時間後の結果では常温保存と冷蔵保存の明らかな差が見られた。また、検体によっては24時間後の値が搬入直後の結果より短縮したものがあつた。今回の検討で、データの変動は大多数の検体で同様の変動を示すが、一律ではないことが分かつた。

【まとめ】

今回の検討結果から、6時間値までは常温冷蔵ともに顕著な変動は認めないが、12時間値以降からは常温保存の検体で大きな変動が認められた。また、冷蔵検体においても24時間値はほぼ全ての検体で変動がみられた。このことから、採血後は冷蔵にて保管し、できる限り12時間以内に検査する必要があると考える。

今回はPT検査にのみ照準を絞って検討を行ったが、今後他の検査項目についても時間経過の影響について検討を行っていく。